

北杜夫全集——7



船乗りクプクプの冒険 奇病連盟

北杜夫全集 — 7



新潮社版

ふなの 船乗り クプクプの ぼうけん 冒険・きびょうれんめい 奇病連盟



〈北杜夫全集7〉

一九七七年三月二〇日 印刷
一九七七年三月二五日 発行

定価一〇〇〇円

著者 北きた 杜もり 夫お

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式会社 新潮 社

東京都新宿区矢来町七一(〒一六二)
電話 営業部 東京(〇三)二六六一五一一
編集部 東京(〇三)二六六一五四一一
振替 東京 四一八〇八番

印刷 株式会社 光邦
製本 大口製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小
社通信係宛御送付下さい。送料小
社負担にてお取替えいたします。

目 次

船乗りクプクプの冒険

奇病連盟

初出と収録

292 115 5

船乗りクラブの冒険・奇病連盟

船
乗
り
ク
ブ
ク
ブ
の
冒
険

クブクブとは何者か？

諸君のうちで宿題の好きな人がいるだろうか。日本でもイギリスでもポルトガルでも中国でも、宿題というものはだれもがきらいだ。どんな偉い人でも、科学者でも、市長さんでも、校長先生でも、やっぱり宿題は好きでなかった。それでも宿題というものはやらなければならぬ。

それだからタローは宿題をやっていた。どんな宿題かというと、算術、算数、数学とかいわれるもので、できがわるい子どもはみんなこれが苦手なのだ。そして、むろんのことタローはできがよいほうではなかった。

彼はブツブツひとりごとをいっていた。

「ええと、十八と五をたすと……二十七と……それを三で割ると……これは八だ。おかしいぞ。妙だぞ。ふしぎだぞ。ヘンチクリンだぞ。こんなふうにスラスラととけてしまはずがないわけがなあ」

彼は二、三度頭をたたいてからつぶやいた。

「この答えがあっているかあっていないかを、ひとつ確かめてみよう。それにはこれを逆にやってみればいい。そのくらのことはちゃんとして知ってるぞ。ええと、八に三をかけると、これは三十二だ。それから五をひくと……ありやありや、まるつきりへんだぞ」

それからタローは大きくうなずいた。

「つまり、この答えはまちがっている。それがわかっただけ、ぼくにしてみれば大それたことだ。きょうはもうこれで宿題をやるのはやめにしよう。これは実にアッパレな考えだ」

こうしてタローは宿題をやめてしまった。

といって、すぐ外へ遊びに行くわけにはいかなかった。なぜなら、おかあさんがちゃんと彼の部屋を見はつていたからだ。ぜひともし勉強をしているフリだけでもしなければならぬ。そこでタローは、一冊の本をとりだした。マンガだろうか？ 西部活劇であろうか？ それとも科学冒険小説か？ いやいや、その本の表紙には、こう記してあった。

『船乗りクブクブ、キタ・モリオ著』

「クブクブだつて？ へんてこな名まえだなあ」と、タローは思った。

もっともその本はタロー自身が買ったのだった。彼は海が好きである。船が好きである。しかし、二、三度海水浴に行ったことがあるきりだし、ボートより大きい船に乗っ

たことはなかった。その代り、彼は、いろんな海の本を、『シンドバッドの冒険』から『海賊物語』というような本をたくさんよんでいる。本屋で目についた『船乗りクブクブ』を中身をひらいてもみずに買ったのもそういうわけだったが、なによりその本がベラボーに安かったからだ。「こんな安い本じゃ、きつとろくなこと書いてないだろうなあ」と、タローは思いながら表紙をひらいた。すると、最初に「まえがき」があって、それにはこう書いてあった。

わたくし、つまり小説家キタ・モリオは、これから船乗りクブクブの物語をかく。

よみたい人はよむがよからうし、よみたくない人はよまないがよからう。

「なんだかこのキタ・モリオって人は、勝手な人だなあ」と、タローは思った。それから、ページをめくって、本文をひらいてみると、そこにはこう書いてあった。

いつの時代か、どこの国かは知らないが、クブクブという少年がいた。

これがつまり船乗りクブクブである。

それがいったいいつの時代であるのか、いったいどこの大陸や海洋の話であるのか、とんとわからぬ。読者はそんなことを知りたがってはいけない。作者のわたしは知らないのだから、どこのだれにきいたってわかりっこない。

「いよいよ勝手な人だなあ」と、タローは思った。それから、次のページをめくってみると、そこにはこう書いてあった。

赤ん坊のときから、クブクブは海が好きだった。彼の家は海べにあった。風のない日、眠たげな波のさざめきを、風の吹く日、ただけしい波のとどろきを、子守歌にして彼は育った。

よちよち歩きができるようになるころから、波打ちぎわはクブクブの遊び場だった。いろんな海藻がうちあげられ、カニやヤドカリや姿のおもしろい貝がごそごそとうごいていた。そうして砂にまみれ、潮水に足をぬらしたクブクブの前には広い青い海がひろがっていた。どこまでも青くはてしなくひろがる海。そうして潮風がやさな少年の髪をみだした。

もうすこし大きくなると、クブクブははるかな水平線

をながめて、ぼんやりと立っていることが多くなった。

なにもかも忘れ、うっとりとしたまなざしで。水平線はわずかに丸かった。ときにはもやのためにかすんでいた。

あのむこうにはなにがあるのだろう。この広い海のはてにはどんな世界があるのだろう。そしてまた、そのまたむこうにも海はやはり広がっているのだろうか。どんな海が？ やっぱりこのように青いのだろうか？

クブクブはなにも知らないのであった。自分の遊び場である海へと、自分の家であるちいさな小屋をのぞいては、なんにも。

「なるほどなあ」とタローは思った。

「やっぱり小説家というからには、なかなかうまいところがあるなあ。これならツヅリカタにしてせば、良の上か、ひよっとすると優をもらえるかもしれないぞ」

しかしまた思った。

「だけど小説家といえば文章をかくのが商売じゃないか。それにしてもあんまりうまくないなあ。きつと三文作家というやつかもしれないぞ」

それからタローは次のページをめくった。そしてビックリした。そこにはなんにも書いてなかったからだ。次のページも、またその次も、ただの一つの活字もないまっ白な

紙にすぎなかった。

これはいったいどうしたわけなのだ？

タローはいっしょうけんめい本をめくってみた。しかしどのページもどのページもまっ白なのだ。なんにも書いてない。これではノートとかわりがない。なんとという本なのだろう。この『船乗りクブクブ』という本は！

事情をうちあげれば、この本の著者、つまりキタ・モリオ氏がそれしか原稿をけなかつたのである。それ以上かく気がなくなってしまったのだ。

キタ・モリオ氏はとびきりのナマケモノであった。朝はなかなか起きない。寝床が好きなのである。あまりおそ起きをするので、起きてからもボウツとしている。日がくると、電灯をつけるのはもったいないといって、すぐさま寝てしまう。これでは原稿などかけるはずがない。

もうひとつ困ったことに、キタ・モリオ氏にこの本をかくことを命じた編集者が、オッカナイ人なのであった。ひげがはえていて、力も強そうで、おまけに短気者ときいてののだ。

「いいですか」と、彼はいった。「あなたはこの本を今月じゅうにかくと約束した。あなたは頭がわるいから念のためにいっておきますが、今月というたと三日ですよ。三日という、あなたは頭がバカだから教えてあげますが、

二十四時間の三倍、つまり七十二時間ですよ。七十二時間という、あなたは頭がヘンだから計算してあげますが、これを分でいうと、ええと四六が二十四、六七が四十二、えい、そんなことはどうでもいい、とにかくあと三日たったらわたしはここにやってきて原稿をいただきますからね」かわいそうなキタ・モリオ氏は努力をした。それはうけあってもいい。彼は朝早くから起きた。しかし目がくらんでなにも書けなかった。彼は夜になっても眠らなかった。マブタがたるんでくると、マツチ棒でつかい棒をした。そのうちとても眠くなってマブタはますます重くなり、マツチ棒がバチンと折れると、彼は新しいマツチ棒でつかい棒をこしらえた。彼は百十三本のマツチ棒を使用した。ただ目をひらいているだけで、一字だってかけはしなかった。

いよいよあと一日と期日が迫ったとき、キタ・モリオ氏は家を売りはらって、別な場所に引っ越してしまった。あのおそろしい編集者がこわかったからだ。期日になって編集者がやってきてみると、家はモヌケのからだだった。

しかし編集者は交番へ行き、区役所へゆき、キタ・モリオ氏の新しい住居をしらべあげた。彼はカンカンになっていた。キタ・モリオ氏の新しい家はたいへん遠かったので、編集者はまず電話をかけようとした。しかし当の相手の家

には電話なんぞついていなかった。編集者は電報をうとうとした。ところが当の相手の家には番地さえついていなかった。

編集者は烈火のごとくおこった。彼はタクシーをよとい、メーターがどんどんあがるのもかまわず、けしからん小説家をつかまえようとやってきた。

ところが、彼がやってきてみると、その家はまたしてもからっぽだった。キタ・モリオ氏は編集者のやってくることを第六感で感じとり、カバンにシャツとパンツと歯ブラシ一本と、そのほか目についたガラクタをつめると、どこへともしれず姿を消してしまったのである。ただ、家の中に、一枚の紙が残っていて、それには『船乗りクラブ』の「あとがき」だけが書いてあった。

こうして、『船乗りクラブ』は大部分白紙の本となつてしまったわけなのだ。

さて、そういう事情を知らないタローは、なんにもかいてない本をあきれてめくっていったが、一番おそしみに「あとがき」というのがのつているのを発見した。それにはこう書かれてあった。

『船乗りクラブ』はこれでおしまいである。なぜなら、わたしがこれ以上かかないからだ。

したがってこの本は、本文が二ページ、「まえがき」と「あとがき」をいれて、合計四ページしかない。それでは本にならぬので、二百四十四ページの白紙をいれることにした。読者はこれをノート代りに使つてよい。フクちゃんクリちゃんや鉄腕アトム絵をかいてもよからうし、わたしの代りに、船乗りクラブの物語を書いてくれれば、一番つごうがよい。

この本はノートとしての価値しかないから、定価ははなはだ安い。したがって印税もタダ同然である。わたしは目下逃走中であるが、このぶんではうえ死にしないともかぎらない。さらば読者よ、ふたたびまみえることは期しがたい。さよなら、バイバイよ。

これを読みおわって、タローは今度こそ本当にあきれてしまった。

「このキタ・モリオって人は、まったくひどいやつだなあ」

タローはフンガイして本をとじた。

と、そのときふしぎなことが起つた。

はじめ、タローはメマイのようなものを感じた。頭のうしろがグルグルとまわり、からだグッともちあげられるような気がした。それから気がとおくなり、ただ、自分が

空中をおそろしい速さでとんでゆくな、とかすかに感じた。どのくらいの時間がたったかはわからない。

皮膚がじりじりとあつい。耳に波の音がきこえた。タローは目をひらき、思わず声をあげそうになった。

ここは部屋の中ではない。焼けるようにあつい砂の上に彼は倒れていた。頭の上にはまっさおにボスター・カラーをぬりたくったような空がひろがり、太陽がギラギラと輝いていた。また波の音がした。タローはからだをおこして、すぐ前に波がくだけて白くあわだつを見た。

ここは海岸なのだ。どこか見知らぬ海岸なのだ。白い砂浜。どこまでもはてしなくひろがる青い海。

「こりやまたどうしたわけなんだ？」とタローは思った。

「それにしても暑いなあ。こりやどうも熱帯地方らしいぞ」

タローは立ちあがって、からだについている砂をはらおうとした。すると、どうも身なりがへんなのだ。彼はさつきまでたしかセーターを着て宿題をやっていたはずだった。

ところが、いまは、なんだかうすぎたない白い服をきている。服というよりボロきれをからだにぐるぐる巻いているといったほうがいい。頭に手をやると、これもターバンみたいな布がまいてある。足は——くつ下さえなかった。まったくのハダシなのだ。足の裏があつい砂をふんでやけ

るようだった。

「はあ、ぼくは夢を見てるんだな」と、タローは思った。「きつと、あんなヘンな本をよんだから、夢をみてるんだ」

夢というものはほんとうに奇妙なものだ。いったいどうして夢なんか見るのか、諸君も大きくなったら研究してみるといい。小さい子どもの夢はわりと単純だ。パイナップルを食いたいと思うとパイナップルの夢をみたりする。ところが、いざそれを食べようとすると、急にパイナップルが大きくなって、おまけに口まであけて、逆に人間が食べられてしまったりする。ほんとうに夢というものは奇妙なものだ。

「夢ならどうせすぐさめるだろう」と、タローは思ったが、またこうも思った。

「すぐさめなくたっていいや。ここが熱帯地方なら、どこかにバナナぐらいありそうだぞ。せめて夢のなかでも、好きなだけバナナを食べてみたいなあ」

しかし、バナナなんて見つからなかった。一面の砂浜と、海と、岩ばかりである。近くには人家さえないらしい。

一匹のカニが足元にはいよってきた。タローがつかまえるようにして手をのばすと、カニはすばやく走って穴の中に逃げこんでしまった。カニは横に走るものである。それな

のにこのカニは縦に走った。

「こいつめ」と、タローは思った。「ヘンチクリンなカニめ。どうしてもつかまえてやるぞ」

そして指先を穴の中にさし入れると、カニはハサミでイヤというほどタローの指先をはさんだ。

「アッチッチ」

タローはあわてて指をひっこめて痛そうにしゃぶつてみたが、ふとこういうことに思いあたった。

「おかしいなあ。夢なら、こんな痛い目にあったなら、たいてい目がさめるものだがなあ」

すると、頭の上で、ふといドラ声（ドラ）がひびきわたった。

「夢ではないぞ」

タローはビックリして顔をあげた。目の前に、がっしりした大男が立っている。赤銅色（せきどうしき）に日やけて、まんまるい目をして、頭はハチにさされたようにデコボコしている。なんだか異様な大男だ。

「おじさんは、だれです？」と、タローはおそるおそるたずねた。

「船乗りヌボー」と、大男はドラ声でこたえた。「さあ行こう、クラブ」

「え、なんですって？」

「もう船がでる時刻なんだ、クラブ」

「クブクブって」と、タローは口ごもった。

「ほくはタローですよ。クブクブなんて知りませんよ」

「おまえはクブクブじゃ」と、大男はわれがねのような大声でいった。「そうきまっているんだ」

「だって……」と、タローはおろおろと口ごもった。「こはいったいどこですか、インドですか、アフリカですか？」

「インドってなんだね？」と、大男はききかえした。

「あれ、インドを知らないの。とにかく日本じゃないんだね」

「ニッポンでなんだね？」

タローは急に不安になってきた。それに大男の服装も、まるでずっと昔の船乗りみたいになかった。こうなのだ。

「いまはいつ？ ぼく、ずいぶん長く眠ったのかな。それとも、あんがいむかしにさかのぼって……。おじさん、今は紀元何年ですか？」

「紀元ってなんだね？」

タローはますます不安になってきた。

「おじさん、船乗りシンドバッドって人、知ってますか？」

「知らん、知らん」と、大男は首をふった。

「じゃあ、海賊ドレイクは？」

「生まれ！」と、大男はどなった。「時代なんかきいたって役にたたん。ここはメチャメチャの土地でメチャメチャの時代なんだ」

「やっぱり夢なんだなあ」と、タローはつぶやいた。「この大男、早く消えちまわないかなあ」

「夢じゃないったら！」

と、大男はとても大きな声でどなった。

「いいかね、おまえはけっして夢をみているんじゃない」

「そんなら、ここはどこなの？」

「ここは物語の世界だ」と、大男はいった。「ここはキタ・モリオとかいうやつが考えた物語の世界なんだ」

それから大男は、急に元気がなくなつて、声をひくめた。「じつはおれも弱っているんだ。キタ・モリオとかいうやつは、地理も歴史もちつとも知らない男らしい。だからこの世界はメチャメチャだ。おまけにおれの頭はこんなにデコボコにされるし、名まえだって、ヌボーなんておれはイヤだ」

そういつて、男はベソをかいた。乱暴のようであんなに気の弱い男なのかもしれない。

しかし、タローはそれどころではなかった。彼はほんとうに心配になってきた。

「じゃあ、ぼくはほんとうにクブクブなの？」

「そうだよ、坊や。真正銘のクブクブだ。ほかのだれでもない」

「いったいどうしたら元の世界へかえられるかしら」

「それはおれもわからない。とにかく、キタ・モリオつてやつは、物語をかきもしないでどこかへいつちまったのだ。それだもので何事につけますます混乱している。きっとあいつもこの世界のどこかにいるにちがいない。もし出会ったら、ひとつおどかしてなんとかしてもらわなくちゃおれだって困る」

「これからどうしたらいいの？」

「船にのるんだよ。もう船出の時刻だ。さあ行こう、クブクブ」

そう呼ばれると、急にタローは自分がクブクブであるように思えてきた。タローなんてどこかほかの他人のような気がしてきたのだ。それに、気がつくと、彼はからだもいつのまにか小さくなっていて、せいぜい十歳かそこの少年のようだった。皮膚のいろもすっかりやけている。まるでアラビアの土人の子だ。

「船はどこ？ おじさん」

「おじさんなんていうな。おれは船乗りヌボーだ。力もつよい。パカ力だ。サメなんか口をつかんでメリメリとひき

さいてしまう」

「ずいぶんいばるんだね」

「いばるわけじゃない。ほんとうに力が強いんだ。しかしアタマは弱い。みんなキタ・モリオのせいだ。とにかく船へ行こうぜ、クブクブ」

「アイ、アイ、サー」(船乗りが船長にこたえるときの言葉)

「しゃれたこというな。しゃれたこといっても、おれにはわからんぞ。なにしろアタマが弱いんだからなあ」

そしてふたりはつれだって、波の打ちよせる海岸づたいに歩いていった。

むこうに岩山がそびえていて、そのかげに一隻の帆船が見えた。ちいさな船だ。おまけに帆もボロボロときている。「ボロっちい船だなあ」

と、以前タローだった少年はつぶやいた。

しかし彼は、胸をはって自分をはげました。

「がんばれよ、クブクブ。おまえはあこがれていた広い海に乗りだすんじゃないか。しっかりしろクブクブ、見知らぬ世界がおまえを待っているのじゃないか」

それから、またちょっと心細くなって、心の中でつぶやいた。

「それにしてもクブクブって、自分の名にしてもへんな名だな。クブクブか、クブクブクブクブクブク……おやおや、

なんだかブクブクにもなっちゃうぞ。なんだかおぼれやす
そうな名まえだなあ」

クブクブ海へ乗り出す

船長は白髪の老人であった。顔じゅうしわがよって、小
がらで、手などはミイラのごとくやせていた。

長年海の生活をしてきた人らしく、からだじゅうあちこ
ちに塩がこびりついている。

大男ヌボーは、クブクブを船長の前につれていった。

「こいつがクブクブです」

船長はジロリと少年を見た。

「ふうん。けっこう大きいな」

「いや、チビですよ。ほんのチビで」と、大男ヌボーは訂
正した。

「だが、太っているようだな」

「いいや、やせてますよ」

「うん、まあいい」と、船長はいった。「こらチビ、ブク
ブクとかいったな」

「いいえ、クブクブですよ、ぼく」

と、クブクブは訂正した。

「なんだって？　どいつもこいつもろくな名まえをしてお
らん。こりや、呼びつけるのも気がおもいわい。それじゃ
チビ、クブクブ、おまえはボーイじゃ。ボーイというのは
なんでもやるのだぞ。わしのパイプだってそうじするんだ
ぞ。わかったか？」

「アイ、アイ、サー」

「なんじゃ、それは」と、船長は目をむいた。「この船で
はそんなことばをつかうことはならん。たとえはこういう
のだ。はい、とか、かしこまりました、とか、あいよ、と
か……。いやいや、あいよ、などというてはならん」

クブクブはクスリと笑った。すると船長がまたジロリと
目をむいたので、あわててこういった。

「あいよ、とはいいません」

「そうじゃ。そして、そのあとに敬称をつける。はい、大
統領。いや、そうじゃない。かしこまりました、大將……。
いや、これもまずいな。ええと、ええと、こらヌボー、わ
しはいったいなんだったっけな？」

「あんたは船長にきまっていますよ」

と、大男ヌボーはこたえた。

「そうじゃ、船長じゃった。いいかチビ、ちゃんと覚えて
おくんだぞ」